福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

# 小川未明の童話作品における時間描写の特性：「時計の話」、「おぢいさんの時計」その他



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2016-04-18<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 中川, 智寛<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | http://hdl.handle.net/10098/9932 |

福井大学初等教育研究　2015，第１号，pp39－44

教育内容研究

# 小川未明の童話作品における時間描写の特性
## ―「時計の話」、「おぢいさんの時計」その他―

福井大学教育地域科学部　中　川　智　寛

小川未明の童話教材作品は、「野ばら」など、これまで決まったものが採用されて来た。今般、『小川未明新収童話集』全６巻が刊行（日外アソシエーツ発行・紀伊国屋書店発売）され、これまで知られていなかった童話作品が、多く味読可能となった。従って、これらの中にも、初等教育教科書に収録が期待される作品はあると考えられるが、今回は、特に時計や時間がテーマとなっているものを取り上げつつ、未明童話における時間認識・時間意識の描写特性の分析を試行し、先に知られている未明の定番童話との比較検討も行い、未明童話の味読拡充を訴求したい。

**キーワード**：小川未明、童話、時間、「時計の話」、「おぢいさんの時計」

### １　はじめに

小川未明の作品は、童話、小説、詩など、実は多岐に亘るが、本稿においては、童話を取り上げて行論する。

小川未明の童話作品をある程度網羅的に扱ったものしては、まず、未明の生前に編まれた『未明選集』全６巻（大14～15、未明選集刊行会）があり、童話に関しては、この内２巻分が充てられている。

戦後、『小川未明童話全集』全12巻（昭25～29、講談社）、『小川未明作品集』（昭29～30、講談社、小説４巻分、感想など１巻分）が刊行されたが、全作品の収録には至らなかったとされる。

更に、未明の没後に『定本　小川未明童話全集』全16巻（昭51～53、講談社）、及び『定本　小川未明小説全集』全６巻（昭54、講談社、小説５巻分、感想など１巻分）が刊行されたが、未収録作品が尚多く残存する結果となった(1)。

この未収録の童話作品を補うべく、今回刊行されたのが、『小川未明新収童話集』全６巻（小埜裕二編、日外アソシエーツ発行、紀伊国屋書店発売）であり、全６巻は年代別に区切られていて、例えば第１巻は、明治39年から大正12年が収録対象となっている。各巻に「解説」、「初出・底本一覧」、「作品名索引」が付されている。

### ２　「時計の話」

「時計の話」（初出は「婦女新聞」、大正７年１月４日）は、以下のような物語である。

ある田舎にいたお爺さんが、時計を買い入れた。村人達は、時計の見方からして知らなかったので、工場の主人でもあるそのお爺さんから時刻の読み取り方を教わり、仕事に従事したが、元来親切なはずのそのお爺さんは、時計を求めてからは、時間に厳格になって行き、村人達は、「窮屈」さを感じるようになって行った。ある「村のお祭日」、皆はいつもより早目の退勤を願い出たが、お爺さんは聞き届けてくれない。困った皆は、お爺さんが居眠りしている隙を突き、時計の短針を一時間進ませるという細工をし、それと気付かないお爺さんは、実際の定刻より一時間早く、皆に帰宅を許す。しかし、翌日、皆は遅刻を叱責される。時計の時刻を早めたままであるから、出勤時間も一時間早くなってしまったのである。二度細工する必要性を感じた皆は、次は、時計の針を二時間分進めてしまうというミスを犯し、やがて、その悪戯は、お爺さんの知る所となる。しかし、お爺さんは、皆を再度叱責するという事はせず、時計で時間を定めるというシステムを廃し、従来通り、日時計で決めるという事にする。

読む時の年齢や読解力にも左右されるかも知れないが、中盤の、二度目の細工の辺りが、物語内容の事実関係を、やや追いにくい。しかし、近代工業の産物である時計の、生活圏への導入→皆の不慣れ・反発→旧来システムの復権、という流れは、概ね読み取れるだろう。お爺さんが「独り者」で「誠にきまりのいゝ人」であるという設定も、物語展開の上で欠かせない要素だが、同時に、「人の好い親切な人」という造型も、等価的に重要であろう。

元々「親切」であるはずの人が、正確な時間という、近代のシステムに搦め取られて行く過程、そして、それが上に立つ者（この場合は経営者）である時、影響を受ける員数が拡大して行くという事も、この作品は物語っているのである。

初等教育においては、このように、「親切」な人が厳格な人柄に変容して行く様態を読むのは、些かショッキングであるかも知れない。しかし、そこに時間を巡る認識の誤差 ── 富者/労働者、近代/反近代などの要素 ── が介在していたという事を、それぞれ分かり易く教師の側が言語化する事、または、児童の側に言語化するのを鍛錬させる事により、その理由が次第に明らかになり、

そして、作品が提起する問題構制は共有され得ると考えられる。

## ３　「おぢいさんの時計」

「おぢいさんの時計」（初出は「サンデー毎日」、大正15年11月14日、及び21日号）は、以下のような内容である。

「おぢいさん」は、町の有名店でスウィツル（スイスの事―中川注）製の懐中時計を購入した。何十年も愛用し、会う人にも自慢し、時間を訊かれて答えた際に、「少し、進んでゐやしませんか」などと言われると、「この時計は標準時計です。一分一秒たりとも狂ふことのない時計です」と言って反駁する程だった。時計の目利きが現れ、その懐中時計の内部構造を見せた「おぢいさん」は、中の石がいくつか抜かれている事を指摘され、その前に修理に出した店の仕業ではないかと疑う。この時計の完全さが減殺されたと思った彼は、以前のようにその時計を自慢はしなくなったが、時間も狂わない為、変わらず愛用した。年月が経ち、東京の息子の所へ行った「おぢいさん」は、「新型の時計」を息子から贈られたのを機に、長年愛用した懐中時計を孫に譲った。孫は、野球をしている時にその時計に傷を付けてしまうが、それと軌を一にするかのように、「おぢいさん」の方も、新型時計の時刻表示などが徐々に気に入らなくなり、新型時計の方を孫に送ってしまう。孫からは懐中時計が返送され、「おぢいさん」の心は「平和」を取り戻す。

序盤、「おぢいさん」が店で時計を購入した後の、「おぢいさんは、もはや、それから三十年あまりになるけれど、その懐中時計を持つてゐました。」という回想体の文章の挿入がやや性急に見えるが、実際に読み進めて行くと、上記した梗概よりも、遙かに緊迫感を味わえる物語であり、「この時期の未明童話は、もっとも挑戦的で、もっとも充実した内容をもったものになっている。この時期、小説と童話の緊張は最高潮に達し、ある小説は童話化し、ある童話は小説化していった」(2) との卓越した指摘が首肯される所である。

この作品には、後半で、「おぢいさん」が新型時計に不満を持つ件で、「（略）よく、二時と三時を間違へたりすること」という風に、時間認識に触れている箇所がないわけではないが、主題としては、むしろ、「懐中時計」という、長年使った愛着あるものと具体的にどのように向き合って行くかという問題提起の方に、より重きが置かれていると見るべきであろう。

作中の記述から、「おぢいさん」が持っていたのは、所謂八日巻きの懐中時計であったと察せられるが、それでも、日本で開発されたクオーツ時計が出現するよりも、かなり前である。クオーツ時計でさえ、月に数秒の誤差は認められる事から、作中で「おぢいさん」が、懐中時計の指し示す時刻を「標準時計」と豪語するのは、童話ゆえの誇張というよりは、「おぢいさん」の時間意識とこの懐中時計とが一体化している事を示していよう。

目に見えない時間という概念から、質料的な時計へ、単に主題が即物的なものになったという意味を超え、未明の問題意識はより鋭角化されて行ったと言えよう。

終盤の展開などは、成人になってから経験が生まれ得るような類のものかも知れないが、そこにこそ、この教材の価値があると言えるだろう。慣れ親しんだものへの愛着と、それを親しい人に譲り渡す可能性。ある程度の年数を生きれば、誰しも直面する問題ではあるのだが、童話を読む年代においては、多くは、「譲り受ける」側としての経験が主であろう。その年代の児童が、「譲り渡す」側が視点人物化されたこの物語を読む事により、普段「譲り受ける」事に終始している自己の立場の相対化をうながされ、やがて「譲り渡す」側になるのだという事を意識化し、そして、「譲り渡して」くれた側の心情を斟酌するという心性を持つ事が期待されるのではないか。

## ４　「街の時計」

「街の時計」（初出は「スキート」、昭和４年４月15日号）は、時計が主人公化され、擬人化されている。

「おれには、春も、冬もない。いつも同じことだ」と半ば嘆く時計に対し、「ちつとは、狂つて、有がたみを教へておやんなさい」と雀が言い、その通りに時計がやってみた所、汽車の遅れなどが生じて人間世界が混乱し、時計は、取り外されて、「廃物」とされてしまうという話である。

未明らしい結末と言えばそれまでだが、最終的には、時計と人間とが対立する図式となっている。しかし、主人公であるこの時計は、最初から人間に混乱を齎す事を企図していたのではなく、その反対に、「自分が、この街の人達に、役に立つてゐると考へると、なんとなく誇らしい気持」になっていたのである。

転回点として、「あの花が、この街の人達に、どんな役に立つかと思ふと、ほんたうに、馬鹿々々しくなりました」と時計が思考する箇所が指摘出来るだろう。花という、限りある命へ人間が愛情を注いでいるのに比し、耐久性がある衣を纏っている自分に対しては、人間は意を注いでくれない。言わば、花への嫉妬心が、雀の唆しに乗るきっかけとなっている。

ここに、先の「おぢいさんの時計」との対比は明らかである。「おぢいさんの時計」では、愛玩され得るサイズである懐中時計が、物語展開の重要な軸となっていたが、この「街の時計」の主役は、時計台に据え付けられている大きな時計であるから、基本的に、人が日々触れて愛玩する対象ではない。そもそも、これは時計台であるから、公共物であり、個人の所有物ではない。従って、この時計が最終的に実行してしまう人間への反抗は、「公共」への反駁であると、極論出来なくもない。それ

は、本稿に挙げた数作品だけを見ても分かるように、未明童話の作品舞台が、徐々に都市へと移行して行く様態とも関連付けられよう。

この童話は、非生物である大時計が主体化されているわけであるが、このような描写法に関連すると考えられる事として、未明は、以下のような言説を残している。

> (略) 童話創作上に必要の条件として、「童心」ということについて言いたいと思います。これは、しばしばいかなるものが「童心」であるかということが問題にされていますが、これを説明するには、たとえば、人間が犬、猫、雲、植物もしくは、無生物などに対して、呼びかけてもおかしくないものがある。またそれを聴く者が第三者として、愚かしいとは感ぜず、真面目に自然にきくというところに童心があるのであります。聴く人、語る人、その共感する所以のものは童心があるからで、ここに純朴な童心の世界があるのです。科学偏重の時代にあっては、これを単なる空想夢想といってしまうが、事実、実世界に、かかる共感の世界がある以上、私は童心を否定することができません。なお童話創作上最も必要な条件は、子供自身の心持、子供自身の世界をよく理解することであります。私たちは、かつて子供の生活をしていた時分、大人や両親や先生等が、どうして自分のこんな心持がわからぬのだろうと、不思議に思ったことさえありましたでしょう。(3)

低学年の児童に対して、ここで「童心」の内実まで詳細に説述する必要性はないであろうが、その分、未明の創作意識が端的に表明されているこの文章を分かり易く、教師の口から説明するのは有効なはずである。決して簡単な作業ではないが、非生物であるはずのものが話したりする描法は、未明の童話に限らない事であるし、また、古典文学における、所謂付喪神などからの承継要素も考えられ、主に教師側に、通り一遍ではない、教授法の工夫が求められる所であろう。

## ５ 「都会の午後五時 ―逢魔(おうま)が時のお伽噺―」

「都会の午後五時 ―逢魔が時のお伽噺―」(初出は「文芸」、昭和29年３月号、以降副題の表記省略) は、少し変わった童話である。

ある日、鉄塔の上から熟練の労働者が転落するという事故と、それとは別に、「自動車が自転車を避けようとして」電車にぶつかって惨事が起きる。前者の事故に関して、地上で、当の転落者の妻子が呼んだのが事故の原因だという噂が立ち、一時は、両者の事故が関連があるとの言も飛ぶが、やがて、後者の事故の方は、「白衣(びゃくい)の鉄脚をはいた軍人」が交通を乱した為だとの目撃証言が支配的となり、その軍人に新聞を渡したという「少年配達夫」が探索される。

ここまでは、一般的な語り手から語られているのだが、視点人物がいきなりこの新聞配達の少年に転換され、少年と老人の会話に移行する。少年は、老人に新聞を渡しがてら、自分の時計の調子が悪いと老人に見てもらおうとするが、老人は、代用として「夜光時計」を渡す。その夜光時計の真の持ち主は、「特攻隊で死んでしまった」のだという。「ゆきずりの町の人」は、冒頭の二件の事故は、戦争に原因があると言い、少年は、軍人に新聞を渡した理由として、「これまでの犠牲者に、少しでも早く、世界が良心に目覚めつつあるのを知らせたいばかり」の事だったと回想する。少年は、探索者に見付かり、軍人に新聞を渡したのかどうか詰問され、それを認めるが、「いかなる場合でも、人間が人間を殺してはならない！」と口ずさむ。

物語の展開は急激に過ぎ、特に後半の人物関係は、一読ではなかなか把握出来ない。冒頭の二件の事故と、末尾の少年の訴えとの関連も判然とせず、全体として、上質の構成とは言えない作品である。前半の展開や事故の原因はともかくとして、少年の口ずさむ内容だけが、この作品から汲み取られる事だとも言える。

物語展開とタイトルとの関連も凡そ理解し難いが、「ちょうど五時を短針がさして、鈍い日光の底に沈んでいるように動かなかった。」とあり、ここで時計の不調に気付いた少年が、老人の元に新聞配達に赴くという箇所がある。タイトルと内容の繋がりを示すのはこの箇所だけであり、それが「五時」でなければならない必然性も不明である。タイトルと冒頭部の二件の事故の描写を見比べると、この「同じ時刻」の事故が起こったのが午後五時だったのかという推測が働くが、それとて、作中に確定的な記述があるわけではない。

午後五時という時刻が、戦争体験に関連して、作者小川にとって何かしらの特別な意味があったのかも知れないが、「特攻隊で死んでしまった」という持ち主の時計が新聞配達の少年に引き継がれるという辺りに、この作品の読み所があるだろうか。ある種の「呪い」の要素を醸し出すこの話は、従前の未明の手法に、戦争への自省という要素が付加されつつ、童話ながら、なかなか複雑な構成をなしていると言える。

この作品は、教材化の場合には、場面転換を克明に追って因果関係を明文化するという事よりも、むしろ、終盤の反戦的メッセージに主眼を置いて、読解がなされるべきものだろう。

## ６ 「時計のない村」

「時計のない村」(初出は「婦人公論」、大正10年１月号) は、村に二つしかない時計が、三十分の誤差を持つようになった為、どちらの時刻表示が正しいかを巡って村が二派に分割されてしまうが、結局双方の時計が壊れてしまい、

村は時計の使用自体をやめ、日時計の使用に戻るという話である。

結末は「時計の話」とほぼ同じであるが、「時計の話」のように特定の人物に焦点化した描写はなく、比較するとやや無機質な感もあるが、その分、近代の産物である時刻表示をどのように運用して行くかという問題を、我々により抽象的に迫っているとも言える(4)。

佐藤宗子(5)は、「時計のない村」の結末について、「(略)昔話のしめくくりのように結ばれているが、現実に「時計」なしで生活することが不可能であるなかで、せめて児童向に、そんな非現実の村を語ろうとしたのだろう」と解釈している。佐藤の論は、物語の内実を、読者である我々により引き付けた、現実的な考えと言えるだろうが、「時計の話」と同じく、読者が成人であっても、大きな問題提起力を持っていると言えるのではないだろうか。

問題を童話の圏域に収斂させずに考えを敷衍すれば、この時計を廃止した村が、時計を設置・使用しているかも知れない近隣の村々と、支障なく交流する事が果たして可能か、という疑問も浮かぶ。

そもそも、この話は、一つの村内の出来事として完結しており、近隣の集落との交通という問題に触れていない。その要素は、「時計の話」と「時計のない村」とでは、後者の方がより強い。童話であるからと言えばそれまでだが、読者が児童か成人かで、問題圏域の把握の仕方も、自ずと変化するのではないだろうか。

「時計のない村」の内実が、「(略) 未明における、それこそ真実の意味での夢想であったといえよう」との指摘(6)もあり、そこに形象化されている結末は、「時計の話」と共に、単に前近代への回帰志向という観点のみでは掬い切れない部分があると考えられる。

教材化に際しては、一方を参考資料としたりする方法により、先の「時計の話」との比較検討も有効かと思われる。どちらの方がまだ現実的か、などの問いを投げ掛けてみれば、あるいは、教師側が予想しない答えが返される可能性も大きいだろう。どちらの作品の方が教材としての適性があるか、学校や学年による温度差も生まれる可能性がある。ある程度の成長があれば、前記した近隣との問題などについて、公共性をキーワードとして考えさせるのも効果があるのではないか。

## 7　「時計と窓の話」

「時計と窓の話」(初収は昭27・1、『太陽と星の下』) は、比較的長い話だが、最初から最後まで、時計が話題となるものである。

主人公「私」(正吉) が、自分の幼児期よりもっと昔の、父が「学生の時分」を回想する所から始まる。父は、ある公使の遺品である外国製のおき時計を古道具屋で見付け、これを購う。当初は、家の柱の所に置かれていたが、「私」が学校へ進学する頃には、別の大きな時計に代替わりとなり、当のおき時計は、父の書斎でほこりをかぶった状態となっていた。それを不憫に思った「私」は、父からそのおき時計を譲り受けたが、少し時間が遅れているのではという指摘を、遊びに来た友人から受け、外国品ゆえに、部品の取得が困難な事を思い、そして、「いくら宝物のようにだいじにしても、時計であるかぎり、時間がくるえば、まったく価値はなくなる」という危惧を抱く。案の定、ある日、「私」は、そのおき時計の遅れのせいで、野球の試合の待ち合わせに遅刻してしまう。このおき時計に対して持っていた「ほこりと喜び」が減退するのを「私」が感じる一方で、父はあまりこだわる様子はなく、むしろ、新しい時計を買ってやると言い、更に、「私」とその妹の為に、家を改装して新しく窓を取り付けると言う。環境が良くなった「私」は喜び、古いおき時計は気にならなくなる。やがて、その時計は、元の購入店である古道具屋に売られ、父は、日本製の新しい目覚まし時計を買って来る。

「時計の話」や「おぢいさんの時計」などからの作品系譜で捉えようとすると、主人公が古いおき時計を修理に出したり、あるいは、修理に出さないまでも、そのままの状態で大切にするような結末が想定されるだろうが、本作の結末は、それを見事に裏切って行く。古くなって正確な時刻表示が出来なくなったおき時計だとはいえ、それをわざわざ元買った店に引き取ってもらっているわけであるから、「私」や父がモノを粗末にしているとは言えないだろうが、やはりここでは、作品の発表年代に留目せざるを得ない。初出は不明とされているが、初収である昭和27年という時期を考え合わせると、戦後の復興と、古きを過度に振り返るまいとする「私」やその父の姿勢とが、重なって見えて来る。その流れに可能な限り矛盾を来さないようにする為、外国製の時計ゆえに部品調達が難しいという事が何回か言及され、この古いおき時計を往時の活躍振り通りに復旧する事に対する諦念への伏線が、準備されているのである。

時計と窓という対比も、通常の比較対象としては捉えられず、作品の結末を向日的な方向性に向かわせる為の、やや分かり易過ぎる仕掛けだとも言える。更に言えば、所謂バッド・エンドではないにも関わらず、未明に多く見られる、暗い結末の童話よりももの悲しい印象を抱くのは、稿者だけであろうか。それは、戦後復興という〈窓〉に向かって行った結果、必ずしも幸福な要素ばかりで満たされてはいない事を知る、今日に生きる我々の悲哀であるだろうか。

結末に着目し、自分が正吉だったらどうしたか、などを考えさせたり話し合わせたりするのが、この作品に対するシンプルな振り返りとして、有効となるのではないか。もちろん、確たる正解があるものでもないが、それを、児童各自が自らの経験則に沿って考える事により、その後、各自が大切にするものと、どう向き合って行くのかを省察する好材料となるはずである。

## 8　結語

以上、『新収童話集』から五編、更に、従前紹介されている『定本　小川未明童話全集』から二編を選択し、考察の対象としてみた。ここに取り上げたのはごく一部であり、上記二種の童話集に限定しても、時間・時計が素材にされているものを更に選び出す事は可能である。

時間や時計を示す語がタイトルに冠されていないものとしては、例えば、「森」（初出は「女子文壇」、明治43年８月号）があり、「夜の十時過」に遊びに出る習慣のあった小太郎は、実は「同じ年頃の少年」と過ごしていたのであり、やがて小太郎は、「一月たたぬうちに」病死する。「５」の「都会の午後五時」同様、「夜の十時」という時刻の蓋然性が判然としないが、しかし、この時刻が、生者の世界と死者の世界とを分かつ、境界として機能していた事は読み取られる(7)。

あるいは、「のこぎりのめたて」（初収は『雪原の少年』、昭８・８、四条書房）では、「時の喪失」(8) がテーマ化されている。

本稿で取り上げた諸作品においても、登場人物群の時間に対する向き合い方は、必ずしも一通りではなく、各発達段階や幼児・児童の特性を踏まえ、作品選択を行う事も可能である。既述して来た作品群では、近代産業文明への過度の接近への警鐘、モノを大切にする心性の重要性、共同体における時間概念の共有性などが、場合によっては、同時進行的に主題化されていると考えられる。

現代の幼年段階では、まずデジタル表示によって時刻表示を覚え、その後に、二針・三針のアナログ時計の時刻表示の見方を体得して行くというのが一般的だろうか。その過程には、時間のあり方、時間の使い方を体得して行くという要素が必然的に付随するだろうし、やがてアナログの時刻表示が難なく読み取れるようになっても、時間とどう向き合って行くのかという問題は、恐らく、終生付きまとう。その事を前提として、幼年段階において時刻表示の読み取りを子供が習得して行く際には、保護者や教員も、程度問題の差はあれ、介在して行かざるを得ない(9)。その際にも、本稿で取り上げた童話の中には、有用な教材となり得るものがあるだろう。

小川未明には、本稿が多く依拠した『新収童話集』の中にも、「兵たいさんが　すき　だ」（初出は「良い子の友」、昭和17年12月号）のような作品もあり、戦争協力に全く無辜ではなかった事が知られるが、一方でその前には、反戦的な作品も残しており(10)、その創作意識については、まだ解明されるべき点も多い。また、象徴主義との関連(11)なども、まだまだ開拓されるべき所である。本稿に即して言っても、戦中期を経て、作者小川未明の時間描写の方法意識がどのような過程を経て変容したかなど、今後新たに資料が発見される期待も含め、未明童話は、豊饒な可能性を多く残していると言えるのである。

### 参考文献


(1)　小埜裕二「解説　もう一人の小川未明」（平26・1、『小川未明新収童話集　1　明治39－大正12年』所収、日外アソシエーツ発行、紀伊国屋書店発売）。

(2)　小埜裕二「解説　静の気持と動の気持」（平26・1、『小川未明新収童話集　2　大正13－昭和2年』所収、日外アソシエーツ発行・紀伊国屋書店発売）。

(3)　小川未明「童話創作の態度（講演）」（昭48・5、小川未明『児童文学論』所収、こぐま社、「青少年文化シリーズ」）。

小川未明における「童心」の形象については、高橋功「小川未明の一考察」（昭47・5、「東海大学紀要」（文学部））、八木明美「小川未明の童話における「童心」と子どもについて」（昭48・12、「大阪薫英女子短大研究報告」）などに言及がある。

(4)　木村小夜「小川未明「赤い蝋燭と人魚」とその周辺」（平19・7、「福井県立大学論集」）は、注の中で「時計のない村」に触れ、「（略）時計によって計測可能な時間の存在を否定しているわけではなく、（中略）多少不正確でも皆がもてることの方が大事だ、という側面に焦点が当てられている」と読み込んでいる。

(5)　佐藤宗子「児童文学における「音」・試論　－南吉・省三・未明を中心に―」（平3・2、「千葉大学教育学部研究紀要」39巻第１部）。佐藤の論は、全体的に、本稿と交差する部分が多い。

(6)　続橋達雄『未明童話の研究』（昭52・1、明治書院、「国文学研究叢書」）。続橋は、「時計のない村」について、「人間に内在する競争心や模倣衝動の不安定性を突いている観」、「商業主義への批判」などに言及しつつ、「作品の冒頭と末尾の照応関係」に注目している。

(7)　長田真紀「小川未明作品考　―小学校国語教材としての今日的意義―」（平19・3、「児童文化研究所所報」、上田女子短期大学）は、この作品には触れていないが、病や死を扱う未明作品も、教材価値があると指摘している。

未明童話と死のイメージとの関連については、他に、郡司和子「小川未明の童話　―死と神秘の世界―」（昭61・3、「日本文学論叢」、茨城キリスト教短期大学）などの研究成果がある。

(8)　大藤幹夫「小川未明の幼年童話試論　―結末部に見る明・暗と教訓―」（平11・2、「学大国文」）。

(9)　幼児・児童の発達段階と時間意識に関する研究として、小川史「陶冶過程における時間調整能力の形成―リテラシーとの関連で―」（平14・3、「児童文化研究所所報」、上田女子短期大学）、池田貞美「児童の過去時間意識の発達に関する研究」（昭32・5、「教育心理学研究」）などがある。

(10)　続橋達雄「小川未明論　「未明の反戦童話」」（昭53・9、「児童文芸」秋季臨時増刊）などを参照。

(11)　未明と象徴主義との関係性について詳しく論及し

たものとして、高橋幸平「小川未明と象徴主義：「扉」のなかで起こったこと」（平22・12、「京都光華女子大学研究紀要」）がある。

※　小川未明の作品の引用に際しては、１の「時計の話」から５の「都会の午後五時」まで、及び８で言及した「森」を『小川未明新収童話集』（全６巻、日外アソシエーツ発行・紀伊国屋書店発売）収録の本文に、６の「時計のない村」と７の「時計と窓の話」を『定本小川未明童話全集』（講談社）収録の本文に、それぞれよった。

引用に当たって、漢字の旧字は現行字体に改め、仮名遣いは原文を尊重した。また、例えば、「お爺さん」と「おぢいさん」などの違いに関しては、それぞれの本文を尊重し、敢えて表記の統一を図らなかった。

**Analysis of characteristic of description of time in Fairy Tales by Mimei OGAWA**
**―“A Tale about a Clock”, “An Old Man’s Pocket Watch”, and so on―**

Tomohiro　NAKAGAWA

Keywords: Mimei OGAWA, Fairy Tale, Time, “A Tale about a Clock”, “An Old Man's Pocket watch”